布哇の日本人

文學士　淺野孝之

昨年の末此方へ歸りましてまだ日も淺いのであります。加藤先生の方から一月（大正十三年）の例會に、布哇に關するお話をしろと云ふ御註文でございまして、實は布哇に關する問題は先生の御研究を仰ぐ積りで、御歸朝の際にお立寄を待つて居つたのでありますが、先生も御都合があつてお寄りになりませぬし、却つて私が電報で呼び寄せられて歸朝し、今日布哇のことを申上げるやうなことになつたのでありますが、丁度一月は病氣をして、折角皆さんが御集り下さいましたに拘らず、甚だ失禮を申上げました。非常に申譯なく存じて居ります。實は一月はキャプテンクックが布哇を發見した月であります。二月はキャプテンクックが土人に殺された月であります。先程土田さんから今日は、聖德太子の御亡くなりになつた日だと云ふ因緣話がありましたが、布哇のお話をする私にも矢張り因緣があるやうに思ひます。私と土田さんとは大學以來實は同じ家の八疊間に寢起きした仲であります。今日二人が爰で一緒

に話を致すのも、何かの因縁かと思ひますが、誠に愉快に思ふのであります。唯お斷り申して置きますのは、土田さんは素からの研究家であられますが、私は通り一遍の人間でありまして、彼方に居りましても研究といふ程の研究は致しませぬ。專攻は宗教でありますけれども、どちかと云へば異端者であります。さう云ふ方面を考へまするとと、適當な講演者でないと存じます。唯御許しを得て素人の見ました布哇の一端を、深味のない事は勿論でありますのみならず、實は不斷研究して居りませず且つ慌だしく歸りましたので纏つた御土産を持つて歸る暇もなく、偶々持つて歸りました書物も、荷物がまだ私の手に入つて居りませぬので、唯好い加減なお土産を掻き集めまして申し上げたいと思つて居ります。

實は申上げます点を書き列ねましたのでありますが、それで場合に依りますと、此中から飛び〴〵に斷片的の御話を申上げることになるかも知れませぬ。其邊も御諒解置きを願ひたいと思ひます。題は「布哇の日本人」と云ふことに申上げてございましたけれども、矢張り布哇のアウトラインを申上げる必要がありはしないかと思ひますので、御存じの方には御迷惑でありませうが、此の点も豫め御承知置きを願ひます。

私は布哇と云ふ所を六號地と申します。何だか田園都市の賣出土地の番號みたやうでありますが、何時も布哇のことは新聞に六號活字で小さく隅の方に扱はれて居る、さう云ふ意味に於て私は六號地と申

します。殆ど世界の人々の問題にされて居ない地理學の上でも、恐らく二行や三行で始末を付けられて居る有樣であります。面積の上から申しても、太平洋の一つのポイントに過ぎないのでありますから、さう云ふ点から申すと、少しも價値が無さそうに見えますが、併しながら深く考へますと、其ワンポイントは神經の末端であつて、表面に現れた所は小さいやうでありますが、感覺は頗る鋭敏であります。斯う云ふ点から申すと、可成り深い意味を有つて居る所ではないかと思ふのであります。それで彼方に居りましたので義理としても、多少勿體を附けてお話をしなければならぬかと思つて居ります。尤も皆さんは彼方を御通りになつたことと思ひますが、布哇は世界周遊の一つの中心で、私共航海します者にとつては、洋上のオアシスとしてなくてはならぬ所なんであります。布哇は横濱から三千四百哩、桑港から二千百哩、其面積は六千五百四十平方哩、四國よりは少し小さいのでありまして、十二の島から出來て居りますが、人口の有りますのが八島でありますので、俗に之を布哇八島と申して居ります。

先日朝日新聞紙上に或記者が「二つの布哇」と云ふことで紹介をされて居つたやうであります。其一つは天然美に對する憧れの布哇、一つは人事に對する呪ひの布哇であつたと思ひます。あの記者が述べて居られます通り、布哇の自然は誠に美しい自然でありまして、布哇の誇りは此天然美に在るのではないかと思はれる位であります。俗に洋上の樂園と云ふ風に申して極樂扱ひにせられて居りますが、そ

れ程布哇と云ふ所は美しいのであります。けれども、又第二の布哇として述べて居りました所の布哇は非常に緊張味を缺いた所でありまして、少しの刺戟もない、何となく夢の國に入つたやうな夢現つの生活をして居るやうな感じがするのであります。斯う云ふ点から申すと、元氣のある人々、將來活動しようと云ふやうな人々は、布哇に永く蟄居すべきものではないと云ふやうな意味に書いてあつたやうでありますが、それは私共尤もだと思ふたのであります。

併しながら是は、唯個人の立場ばかりから考へたのでありまして、之を國家的に考へ或は世界的に考へ色々の方面から考へて矢張り布哇は布哇に相當した價値があるのだらうと思ひます。殊に經濟的に考へ或は政治的に考へ更に軍事的に考へ、もう一つ文化の上から考へると、布哇はさう馬鹿にしたものではないのだと云ふ感じが致します。私は布哇は亞米利加にとつては、經濟的或は政治的と云ふよりも、軍事上の前哨地と思ひます。併しながら日本から考へますと、東洋文化の前哨地と考へて居るのであります。さう云ふ意味に於て布哇といふ所をお考へ下さることは、決して無意味のことでないと思つて居ります。のみならず將來の布哇は恐らく新しい人種の生れる所で、新しい思想が生れさうして新しい文明を生む土地になりはしないかと云ふ樣なこと迄も、少し深入りし過ぎますが考へて居るのであります。さう云ふやうな意味で私は勿体を附けて申上げて置きます。もう一つは此布哇は東西の融合地であ

ります。能く西洋人は西は西、東は東と云ふやうなことを申して居りますけれども、併し此布哇と云ふ所は此言葉を裏切つて東西の人が相接觸し融合して居る土地なんであります。此世界の中で東洋と西洋とが融合する所と申しますれば、コンスタンチノープルとホノルルであると思つて居りますが、併し過去から考へて見ましても、現在の狀態を見ましても、或は將來の希望と云ふ点から見たならば、私はホノルルは寧ろコンスタンチノープル以上に東西兩洋の接觸地、融合する大事な場所であらうと思ふのであります。

氣候のことを申上げて置きますが、御承知の通り布哇は非常に暖い所でありまして、北緯十九度から二十三度に跨つて居る所で所謂熱帶の圈内に入るのでありますが、東北の方から常に貿易風が吹いて居りますので、非常に涼しく感じます。のみならず同じ方向から一つの冷たい海流が流れて來て居ります。其爲に氣候が緩和されて氣候の点から申しますと、全く理想的の所であります。寒暖計は六十度から九十度迄の寒暖計があれば、事足りると云はれて居る位で、此間も手紙が參りまして、到頭冬の休みになつた子供達は海水浴をしようと云つて喜んで居ると云ふ便りがありました。お正月なども此方では廻禮でも致しますと、熱いお酒を出して寒さを忘れると云ふ所で、お正月氣分になるのでありますが、向では汗

を拭さながら氷水を出して貰ひたいと云ふやうな譯で、大体のことは御想像が附くだらうと思ひます。此布哇に於ては旋風などと云ふものはありませぬ。雷と云ふのも近頃少しあるのですが、もとは無かつたのであります。不思議なのでありますが、土人に言はせますと絶對に雷はなかつた、何時頃からあるかと云ふと、日本人が來た時からある。結局日本人が持つて來たのだと云つて居ります。そんなことを申しますが、極く小さな雷であります。地震は火山系に屬して居る所でありますけれども、殆どありませぬ。

それから少し飛びまして天然美のことに就いて申上げたいと思ひますが、先程申上げましたやうに布哇の値打ちと云ふのは、人間の無理にこじ付けた値打を除きますと、どうしても天然美と云ふ所に布哇の誇りもあり價値もあるのではないかと思ひます。船で旅行しまして、あそこに着いた時目に付くのは、乳光色の海の色であります。或は島の周圍を取り卷いて居る暗礁に閃く波の色であります。殊に私共斯う云ふ國に生れた者に珍しいのは、海岸に並んで居る椰子の並木であります。其葉蔭などで年から年中殆ど仲秋の月の冴えわたつてゐる月を見ながら土人の奏でますウクレレの音を聽きますと云ふのは、南國の特殊な情調ではないかと思つて居ります。此ホノルゝと云ふ所は、俗に森の町とか或は綠の都と云ふ風に言はれて居ります。其名の如く全く森であります綠の町であります。山の上から見ますと

人口は十萬程ありますが、其家が悉く樹の蔭に隱れて居るのであります。どう考へましても、之が人口十萬の都市であると云ふやうな感じは致しませぬ。如何にも凉しさうな豊かな感じが致します。ホノルルと申します言葉は豊饒「ゆたか」と云ふ意味で、もう一つは極樂とか樂園とか云ふ意味を有つて居るのであります。さう云ふ風でありまして、其言葉に依つて表されて居る如く、非常に布哇と云ふ所は自然から惠まれて居る所であります。花は常に四時咲き乱れて居りますと云ふと仰山のやうですが、是は單なる形容詞ではありませぬ。寧ろ實際を觀て知つた方が能く分ると思ひますが、四時咲乱れて居る、誠に晩春の頃のやうな感じが致します。亦綠は常に滴つて居りまして、夏のやうな感じが致します。果物は常に實つて居りまして、秋のやうな氣持が致します。さう云ふ点から布哇は常春の國、常夏の國、常秋の國であります。殊に空氣の關係もありませう。月が冴えて居り。所謂朧月と云ふものは到底見ることが出來ないのでありまして、常に仲秋の月と云ふやうに澄み切つた月を見ることが出來ます。星を見ますと星の瞬きははつきりして居りまして、あの形が星の圖の通りである。大体赤味に見えるばかりでなく、あの亞米利加の國旗に表れて居るやうな星の形に見える。私共は星低き國などと云ふ洒落た名を附けて居ります。冬の此雪（此日降雪霏霏たり、窓外を眺められる）此雪だけは布哇にありませぬけれども、富士山より一千尺ばかり高いマウナケヤ、マウナロアと云ふ山上には雪があります。マウ

ナケヤといふのは、雪の山、マウナロアと云ふのは鯨の寢た形をしてゐますので鯨の山であります。此マウナケヤの山嶺には雪を戴いて居りますから、其處に冬らしい姿を見せて貰へるだけであります。斯う云ふ点から考へますと、布哇は要するに、四季の一番好い所を集めて自然の惠みの豊かな土地だと云ふことを言ひ得るのであります。一寸妙なお話でありますが。是は他で餘り見られない現象であります。一本の樹を見ますと、之に四季が現れて居る如き感じが致します。一方の側には若芽が萠え出でゝ居ります。一方の寒い側には綠滴つて居る。是は葉でございますが、それに又花が咲て居るのであります。同じ樹に實が成つて居るのであります。斯う云ふやうな現象が一本の木に現れて居ると云ふのは一寸面白い現象で、布哇の氣候と云ふことを其一本の木に依つて、想像されるのではないかと云ふやうに思ひます。

序でありますから申上げて置きますが、布哇は大變花が多く、ハイビスカスと云ふのが布哇の代表の花でありますが、私共近頃痛快に感じたのは菊が移し植ゑられて立派に培養されて居ります。全く日本でなければ見られないやうな立派なもので、之を天長節などに立てまして、天長の無窮を私共は言祝ぐのでありますが、之が西洋人に非常に喜ばれて居るのであります。皆樣はそれ程に御感じはございますまいが、他の國の國旗の下に生活して居ります者は、さうした御國の花を見る時は全く心強き慰めを得

るのであります。

何時もお尋ねを受けるのは、布哇に蛇が居るだらうといふことでありますが、蛇は一匹も居りませぬ。如何なる時にも蛇は居りませぬ猛獸も居りませぬ。居りましても山豚位であります。大したものではありませぬ。それから野禽でありますが、矢張り洋上の樂園でありますので、其處には極樂の鳥と云はれて居ります。孔雀とか或は七面鳥といつたやうなものが野生として或方面には居るのであります。其外色々な種類の鳥が常に囀つて居るのであります。

それからあちらの雨、是は熱帶國の常として日が照りながら雨が降るのであります。さうして月が冴えながら、矢張り雨が降るのであります。非常に面白い現象でありまして、天の半分から下へ來て上は、もう我不關焉と自分の役目を司つて居るやうであります。非常に大きい雨は降らぬやうで、どつちかと云ふと雨量も少いのでありますが、唯毎日さあつと時雨れて行く其後の感じが好いのであります。殊に好いのは雨が時雨れて行つた後、椰子の間から白い雲がふわり〳〵と浮んで參ります。それが常に虹を彩どるのであります。布哇の名物としまして皆虹を申すのであります。布哇の虹は實に美しい虹であります、大きな虹であります。それが唯一つの虹でなくして二重の虹があります。三重の虹が現れる、特に面白いのは夜の虹であります。皆さんは恐らく夜の虹は御覽になつたことはございますまいと

思ひますが夜の虹は色ははつきり分りませぬが併し其に少し色めいた所が現れて居るやうであります。

布哇は非常に傳說の多い所でありますが、此自然にしても川は餘りないのでありますが、川にしても、樹にしても、或は雨にしても、霧にしても、虹にしても、或は火山にしても、斯う云ふ自然現象には必ず一つの傳說が伴つて居るのであつて、自然現象を見る度毎に面白く感ずるのでありますが、其一つとして虹のことを申上げて見たいと思ひます。此虹の元はホノルルにあります。マノアの谷と云ふ所でありますが、其處に虹姫の傳說があります。カハラオプナと云ふ娘が居て、其娘に許嫁の夫があつたのであります。所が外の最も心好くない男の嫉妬を買ひまして、其許嫁の夫に讒言をせられ、遂に其夫が其娘を殺すのであります、七度殺すのであります。其都度あちらの靈鳥と呼ばれて居る梟の爲に助けられ、遂に甦つたのでありますが、其許嫁の夫と云ふのは非常に執念深い男で、遂に自分の作つた業に依つて海に入つて、鱶になつて、其女を殺さうと云ふ執念を持つのであります。此カハラオプナの兩親は非常に娘を戒めまして、海へ行つてはいけない、波乘りに行つてはいかぬ――此波乘と云ふことを一寸お話申上げますが、あちらにお出でになつた方は御存じでありませうが、一尺五寸位の幅で長さは一間か一間半位ある、平たい板を持つて遠淺でありますから、それを持つて沖の方へ行つて待つて居るのであります。其處へ大きな太平洋の波が押寄せて來ると、平たい板とも波に乘りまして、波の力に依

りまして岸迄ずつと押寄せて來る、或は逆立ちをして來る者もある、それをサーフライヂングと云つて布哇の名高いスポートになつて居ります。此波乘といふものに娘が行かうとするのを止めたのであります。――此戒めを捨てゝ娘が波乘りに行つて、自分の許嫁の夫の鰭に喰ひ殺されたのであります。所が喰ひ殺されますと其女は兩親を慕ひまして、どうかして此世の中に殘りたいと云ふ其娘の芳魂が今日空を彩どる虹となつて殘つたのだと云ふ。兩親は又娘のことを案じまして、これが雨となり霧となつて、殘つたと云ふことであります。マノアは虹姫の奥津城のある所となつて居ります。マノアの谷が雨や霧に煙る時カハラオプナの虹姫は谷を出でて、空を彩るのだと云ふ、さうした自然現象の中に傳說が殘つて居ると云ふことは、實に美しいと思ふのであります。これは傳說の一つとして申上げて後の場合は申上げませぬが、要するに布哇は傳說の國であり、或は詩の國であり歌の國であると感じたのであります。實際あちらの人々の生活を見ますと、さう云ふ風に思はれるのであります。不思議に土人と云ふものは音樂の才能を有つて居ります。如何なる土人も皆樂器を奏します。さうして其聲が非常に美しい聲でありまして、獨特の肉聲を有つて居ります。あちらに生れた日本人の子供でございましても、一体内地の日本人と違つて好い聲を有つて居ります。不思議に肉聲が優れて居るやうに思ひます。今日東京で持囃されて居る曾我部靜子さんなども布哇が生んだ聲樂家であります。誰も押並べて音樂に對する趣味

を有つて居ります。私が生徒の趣味等に付いて調査を致しました時に、殆ど全部が音樂と運動に對する趣味を有つて居つたと云ふ、さう云ふ方面の才能が優れて居る。さう云ふ点から考へますと、布哇は夢の國であると云ふ感じが致します。

布哇の自然の中で最も面白いのは、キラウエヤの火山でございます。もう御覽の方があるかも存じませぬが、世界第一の噴火口があります。現に火を噴いて居るのでありますが、先程申上げましたマウナケヤの下の方にあります、海拔四千尺位あるかと思ひます、周圍が八哩、東西の直徑が二哩、南北が三哩と云ふ實に大きな火山であります。それから煙を吹くのでありますから、全く火の海であります。自動車で其處迄往けるのですが、夕方でも參りますと、眞赤に天を焦して居ります、其處でこちらの方から聞きますと轟々と云ふ音を立てゝ居りますので、どう考へても海のやうな感じが致しますが、側へ往つて見ますと、少し硫黄臭いのでありますけれども、其岸から下を見ることが出來ます。全く火の海であります。其周廻八哩の全部が火で、勿論時に依つて非常に違ふのでありまして、ずつと下る時も上る時も、能く見えて居らぬ時も見えて居る時もありますが、私共最初見ました時には全部が火でありまして、それが波立つて岸に寄せて來る位でありますから、其壯觀なことは他に例がない。わざ〳〵大陸邊りから之を見物に來るのでありますが、其キラウエヤの火山、火の地獄、此世の地獄、極樂と地獄と

は隣り合せだと申しますが、何だか甘く出來て居ると云ふ感じが致します。所が不思議なことには日本に震災がありましてから、其影響だと言つて居りますが、すつかり停つたのであります、あの震災がありました時に、あちらに一つの海嘯が起りました時分にも、不思議なことと思つて居りましたが、其影響ではなからうかと云ふことを言つて居ります。此方に地震がありましてから、火山が燃えなくなつたと云ふことは事實であります。今日ではずつと底へ落ちまして燃えて居らぬ。休火山と云ふ所までは行かぬ活火山ではありますが、燃えて居らぬと云ふことになつて居ります。之を今日では、國立公園にしてお客さんを引付けやうとして居ります。又無鉄砲なと云つては語弊がありますが、元氣な亞米利加人は此の火山の火力を利用して電氣を起さうなどと云ふ計畫なども立てゝ居るやうであります。それは先づ其位にして置きます。

布哇の發見でありますが、布哇は普通一千七百七十八年今から百五十年前に英吉利の探險家のキャツプテンクックが發見した、と云ふことになつて居りますけれども、實際を申すと、もう一千五百五十五年に西班牙の船長が、自分の妹と一緒に流れ着いたと云ふことになつて居ります。其當時布哇と云ふ所は、元來文字のない國でありますから、文書の上にはそれが殘つては居ないのでありますが、口碑の上などにそれが傳へられて居りますのと、もう一つは現在の布哇の王冠が土人の人種はポリネシヤンであ

りますが、ポリネシヤンのでなくして西牙班風の王冠が殘つて居ります。さう云ふ点から考へますと西班牙人が發見したと云ふことは明かに證據立てられるのでありますが、惜しい哉發見者としての名譽はキヤプテンクツクが取つたのであります。キヤプテンクツクの事に就ては畧しますがキヤプテンクツクは此島を發見しますや自分の恩人で時の英吉利の海軍卿サンドウイツチ伯の名を取つてサンドウツイチ諸島と命名しました。クツクがサンドウイツを取つたと云ふのは洒落でありますが、今日はサンドウイツチなどとは申しませぬ。亞米利加の地理書にも布哇島として書いて仕舞つて居ります。其處に亞米利加の對英感情が表れて居るのでありまして、米人は餘り英國人を歡迎しないのであります。其處に住んで居ります人は、是は只今申上げましたやうなポリネシヤンでありますが、あちらではカナカと申して居ります。今は土人の言葉を取つて居りますが、キヤプテンクツクが發見した時はカナカといふポリネシヤンが住んで居たのであります。併し何時の頃布哇に移つて來たかと云ふことは全く前申上げた通り何等の記錄がないのであります。けれどもあちらの俗歌俗謠とか或は戀歌或は人の德を稱へます所の頌德の歌とか祈禱の歌、祈禱の言葉、さう云ふやうなもの、或は今迄の言ひ傳へに依つて察しますのと、もう一つは近頃屢々到る處で發見され色々な熔岩の下などから出て來ます骨などに依つて、凡そ西曆紀元五百年頃には此處に移り住んで居つたものであらうと云ふことになつて居ります。其人間はどう云ふ

人間かと申しますと、美しい自然の布哇には極めて不調和な人間でありまして、少し堂々過ぎるやうな人間が住んで居ります。色は赤銅色をして居りまして、體格などは實に堂々たる體格で二十五貫、三十貫、三十五貫位あるのは、ザラにあるのであります。私は可成り日本人としては大きな方で、あちらに居る時二十五貫ありましたが、あれ等の中へ入ると少しも目立ぬ實に立派な肉體美を有して居ります。どうして斯う云ふ堂々たる人種が滅びるかと思ひます。女の方も少し調和を缺きますが、實に確かりした女であります。妙なお話でありますが。私共の近くに住んで居る或る土人の女は豚の丸燒きを致します時分に、豚を脇の下に抱へ込んで血を絞るなんと云ふ乱暴なことをやります。併し食人種ではありませぬ。先づ氣風は優しい極く穩かな人種であります。所が此キャプテンクックが發見した當時は四十萬の土人が住んで居つたと云ふのでありますが、是は少し勘定が多き過ぎはしないかと思つて居ります。けれども兎に角四十萬居つたと云ふ、百五十年後の今日は僅に二萬一千の土人しか住んで居らぬのであります。さうして年々非常な率を以て減少して行くのでありますから、此人種が詰り純粹の土人としては滅びるのも、さう遠くないだらうと思つて居ります。

何故さう云ふ風に土人が滅びて行くか、少くなつて行くかと申しますと、是には色々な原因があるだらうとは思ひますけれども、此死亡率子供死亡の割合などを見ますと云ふと、實にひどいのでありま

す。大陸に於ては生れて來ます子供千人に就いて、死亡が平均七十六人と云ふことになつて居ります。布哇はどうかと云ふと百三十五人九分であります。まあ百四十人程の死亡率があります。それは布哇としての平均でありますが、之を人種別にしますと云ふと、非常に興味のあることと思ふのでありますが、一番布哇の中で死亡率の多いのは、ヒリツピン人で千人中三百六十六人迄死んでしまふのでありまして、其次は布哇の土人で三百四人であります、一千九百二十三年の調べであります。それから日本人で百二十人、それから白人と土人との混血兒が九十六人、一方が土人でも白人が加つた爲に、九十六人位になつて居ります。純白人が五十五人、支那人は日本人より好く、六十五人であります。茲に現れた率を見ますと云ふと、其處に衛生的の智識と云ふことの厚薄深淺を計ることが出來るのではないかと思つて居ります。餘りさうした方面の智識がないのぢやないかと思つて居ります。日本人の率の多いと云ふことも、餘り好いことぢやないと思つて居ります。さう云ふ風に折角子供が生れても、夭折すると云ふことが滅んで行く一つの原因でありませうが、もう一つは土人に西洋文明の影響がありはしないか小さな藁小屋と云ふことも考へるのであります。元來土人の生活と申すと、裸体の生活跣足の生活であり、さうして住んで居つた極く原始的な生活をして居つたのでありますが。それがキャプテンクックが發見しますと續いて基督教の人達がどん〳〵入り込んで生活が向上して參りますと共に、其土人の減

少率が急に多くなつたのでありますが、さう云ふ点から考へますと、是は寧ろあれ等には文明生活になれないのではなかつたらうか、後にお話をしますがキャプテンクックが發見した當時は石器時代で殆ど金屬がなかつたのであります。今から百五十年前迄石器時代であつた。それが急に泰西の文明が侵入して彼等の生活が根本的に改造されたのであります、其間に私は非常な溝が出來たらうと思ひますが、そんな急激な生活の變化、消化しきれない生活が、死亡率を高めたのではないかと考へられる。今日土人を保護したいと云ふ目的で、何處か一定の地を與へ裸体で跣足で元のやうな原始的生活をさせる運動を企てゝ居る人もありますが、併しそれは殆ど實行の出來ないことで、もう文明の享樂的な生活に慣れて居る者は、殆ど元の土人の生活には歸られない。それから先程お話した衛生思想の缺如して居ると云ふこと、それから酒の害であります。是は土人には非常に氣の毒でありまして、元の土人はさう酒に溺れるものではない、極く輕いアワと云ふアルコール分の少ないものを飲んで居つたのでありますが、それが白人が入つて來ますと共に、酒などはどん〳〵入りまして土人を到頭酒飲みの人間にしてしまつたのであります。勿論歴史的に申すならば、色々其間に禁酒運動なども行はれて消長はあつたやうでありますけれども、併し今日何處へ參つても、酒飲みの土人を發見すると云ふことにしてしまつたと云ふことも、彼等の人口を減少する所の一つの原因であつたと思ひます。又もう一つ言ひますならば、民族的の

或は國家的の自覺がないと云ふこと、是が實際彼等をして此人口減少の一つの原因になつて居りやしないかと思ふ、どう考へても彼等は怠惰の民であります。それは天産が豊かであるからして食べるものは何れにも出來るのであります。働かずして食べることが出來ると云ふのでありますから、今日の經濟思想から申しますと、實に予盾したことでありますが、さう云ふことが自然に彼等を怠惰に導き、競爭する力を失つて仕舞つて、詰り劣敗者として亡國の悲みに會はなければならぬやうなことにしたのではないかと思ひます。土人青年の意氣なるものは、探さうとしても探されるものではないのであります。不良少年不良青年と云ひますと、大概土人の子供が多いのであります。大きな身躰をして學校にも行かないでぶら〳〵遊んで居りますのも、土人の子であります。セキシユアルの生活、性的生活が非常に放縱に流れて居るといふことを、又考へなければならぬことと思ひます。のみならず子弟の教育の責任者である所の母親婦女子と云ふ者が布哇土人に於ては全く成つて居ないやうであります。あれが妻として或は母親としてどれだけの責任が盡せるだらうかと疑はれる位低級な人間が澤山あります。日本人なども止むを得ず、あちらに參つた當時、妻にして居る者もありますが皆弱つて居ります。女と結婚をしますと、男は其妻君の家族全部を引受けなければならぬと云ふ狀態なのが澤山あります。若し國家興隆の力が母親にあるとするならば、布哇の滅びる所の原因も其布哇の婦人にあるものとも言ひ得るかと思ふの

であります。性的生活と云ふものが、極くだらしがないのでありまして、所謂貞操觀念などと云ふことは餘りないのでありますから、さう云ふやうなとが詰り布哇の土人の血を純潔に保つことが出來ないで所謂混血兒と云ふことが非常に澤山になつた原因になるだらうと思ひます。今日布哇の混血兒は二萬三千或はもつとあるだらうと思ひますが、統計は同じ統計を使つたが宜しいと思ひます、同じ年の統計から申すと、純土人の二萬一千に對して、混血兒は二萬三千八百であります。それ位に雜種兒がある譯であります。で國家の團結力などと云ふものは、此ピューアブラッドと云ふことに關係があるだらうと思ひますから、さう云ふ点も考へ得ると思ひます。序に申し上げますが、土人はどう云ふ人間と結婚してるかと申しますると、亞細亞人と結婚して居りますのが七千四百人、それからコーカシャン所謂白人と結婚して居りますのが一萬六千四百人と云ふやうなことになつて居ります。人のことをお話する序に此布哇に居ります日本人のことを能く聞かれますから、それを申上げて見たいと思ひますが、千九百二十三年の統計に依りますと、概數でありますが、約三十萬の人口があります其中で、日本人が十二萬であります。殆ど四十二パーセント、それから支那人が二萬四千、八パーセント、それ亞米利加人或は北歐人、英吉利、獨逸、露西亞と云ふさう云ふものを入れて三萬六千、十二パーセントと云ふやうな割合であります。所が、日本人の混血兒と云ふものは、極めて少いのであります。實は日本人が雜婚をし

ませぬとは非常な問題になりまして、日本人が米國に同化しないと云ふ口實の一つの材料として、雜婚を嫌ふと云ふことを非常にやかましく言つて居ります。統計の上から見ますと、是は千九百二十二年の調査で、之も概數でありますけれども、日本人の男子で外國人と結婚したものが百十六人、女子が三十人であります。計百四十六人、其後大分殖えたやうであります。それがどう云ふ人種と結婚して居るかと云ふと、矢張り土人が一番多く、七十八人であります。それから葡萄牙人が二十八人、亞米利加人が九人、比律賓人が十人、比律賓人との結婚は、段々殖えて來る傾向があります。支那人と結婚したのは十一人、朝鮮人六人、獨逸人二人、英國人一人であります。支那人は日本人よりももつと雜婚して居ります。是は支那人の勞働者が日本人より早く參りまして、而も獨身であつたと云ふ所に原因して居るだらうと思ひますが、非常に多いのであります。さうして支那人と土人との間に出來ます者が、非常に優良な者が多いのであります。今日あちらの要路に立つて居ります者の中にも或は其外精神界に働いて居ります者の中にも、支那人と土人の間に出來ました者が澤山あります。恐らく布哇の支那人は本國の支那人よりも優良だらうと言はれて居ります。牛島ポテート王が言ひました言葉に薯などを植ゑるにしても色々違つた種類を一つ置きに植ゑると、其間に生れる混血薯も可笑しうございますが、非常に優秀な薯は同じ種類の薯を竝べて植ゑては得られないと云つて居ります。其点を裏書したことになるだらう

と思ひますが、併し日本人の場合について考へると非常に惡い土人と日本人との間に生れた者はお話にならぬ位惡い。併し私は是は恐らく此兩方の素質の違ひではないかと思ふのであります。原則としては今ポテトーのお話を申上げましたが、それを認めまして日本人の場合に於ては、是は非常に親が惡かつた、親となるべき者の素質が惡かつたのだらうと思ひます。本來日本人は雜婚を勿論嫌ふ傾向があるのであります、それにも拘らず、結婚をしたのでありますが、非常に男の親も不味いが土人の女親が又一層不味かつたに違ひないのであります。日本人が亞米利加人から非常に雜婚を奬勵せられて、やかましく申されて居るにも拘らず、雜婚を嫌ふ原因としましては、民族的の自覺が非常に強いので、さうして血液の純潔と云ふことを彼等は貴ぶのであります、もう一つは日本人の結婚の慣習が兩親の選擇に依ると云ふことも原因して居ると思ふ。もう一つ女子の供給が可なり豐かであつたと云ふと、更に彼等の根本思想として永住土着の精神がなかつた、三年の契約が濟めば日本に歸つて日本で暖かい家庭を持たうと云ふ精神、斯う云ふやうなことが原因になつて、雜婚と云ふことを嫌つたのであらうと思ふのであります。もう一つ穿ち過ぎて居るか知れませぬが、相手が白人であつたら喜んで結婚したかと思はれる點がある。けれども、白人は決して日本人を歡迎しませぬ。今統計に表した如く獨逸人二人と英國人が一人であります。而かも是は女が多いのであります、男子が日本人である、女の方を外國人を選んだので

ありますから、其統計を見ましても中々白人との結婚は少い、白人の方も厭なのでありませう。

私か自分の學校の女生徒に付て調査をしたことがあります。夫は何人種を選ぶか、日本ではそんな所の調査をする必要はないのでありますが、彼方では調査の必要もありますし、興味のある問題ですから調査をしました所が、異人種との結婚は氣詰りだ、それから理窟を言ふ者は日本の家族制度に反しますから、迚も白人種と同居することは出來ない、同居をするとなると決してうまく行かない、日本の家族制度の上からいけない、もう一つは生活費の向上、到底日本人の經濟では行けない、それから慣習が違ふと云ふやうなことを言つて居るやうであります。

併しながら私は是は時代と共に變化して行くものであると思つて居ります。何となれば古い人は段々と死んで參ります、日本から婦人を呼寄せると云ふことは絶對にいけないことになつて居ります、今日迄は兎も角でありますが、今後中々日本から妻君を呼ぶと云ふことも出來ないのであります、それは餘り大きな理由になりませぬから取消しますが。米國の自由教育を受けました結果として子供達の間に人種的の觀念が餘りありませぬ、如何なる人種に對しても親みを有つて何等の區別が無いやうであります。

さうしてそれに反して日本から來ます日本生れの者との間に非常に融和しない思想が違ふ故でありますが、日本生れと布哇生れと調和をしませぬ、若し此勢で行きますならば布哇に生れました者は、

日本から來た者よりも彼方の日本人と結婚したい、さうでなければ彼方の他の人種と結婚したいと云ふので、秤に掛けて見たならば自分等が小學校時代から生活して來た他の人種の人を日本生れの人より好くのぢやないかと思ひます。殊に彼方生れの女子が日本生れの男子との離婚の理由に、日本生れの男子は女を扱ふ道を知らぬといふことを離婚の理由として居ります、中々むづかしい。是は長くなりますから申しませぬが歴史的に見ると非常に變化がありまして、私の參りました大正六年頃はまだ／＼日本生れとの結婚を歡迎することもありました。彼方生れの者が其樣な傾向が非常にありましたが、昨今米國に米化運動が行はれて來まして以來は非常に其現象が變つて來たやうに考へて居ります。兎に角どう考へましても日本人に限らず總ての人種を通じて布哇は雜婚の國になるだらう、布哇に生れます所の子供は純粹の血の者でなくして色々の血の混つた者が生れて來るに相違ないと思ひます。さう云ふ點も興味のある問題で、それから生れて來る色々な問題が特種の色を帶びて來るであらうと思ひます。要するに布哇は雜婚の實驗所とでも言ひますが、さう云ふ風になるのであります。

それから布哇の文化をちよつと申上げます。此布哇の文化を語りますに就ては、どうしても基督敎の僧侶と其活動を無視することは出來ないのであります。前にお話したやうに千七百七十八年にキャプテンクックが彼方を發見しました當時は布哇は石器時代でありました、絶對に金屬類は無かつたのであり

ます、總て石であつたのであります。それは今日でもまだ大分石を使つて居るのであります。實は若し加藤先生がお出下すつたならば、さう云ふ方の御研究を願はうと思ひましたが、此石器がリンガー崇拜陰陽崇拜の跡を止めて居るやうな氣がするのであります。是は先生のお出を願はなかつたのは非常に殘念なのであります。歴史的に申すならば、彼方の文明は封建的であつた、是は十八世紀以後なのでありますが、文明は封建的であつて、民族は三つの階級に分れて居りました、貴族と僧侶と平民、此平民と云ふのは、非常に貧乏でもありますし、殆ど僅かに口を糊すると云ふ極く低級な人民になつて居ります是の上に更に酋長と云ふのが居ります。此酋長は是等の三つの階級を超越した者であります。決して人間と思つて居ない。神の子孫と思うて居つた。それで酋長は政治を支配し宗教を支配して居りました。土地は酋長の所有で、さうして其土地を貴族に分つてやります。貴族は更に平民に分つて其土地を耕して行く、のみならず甚しいのは此平民の勞働其のものも酋長の財産酋長の所有でありました。それから坊さんでありますが、是は世襲であつて單に坊さんの仕事ばかりでなく、天文の方、或は醫者の方、何處の國にでもあつた譯でありますが、醫者の方を扱つて居りました。殊に坊さんの低級な者は色々なお禁厭をやるとか或は呪をやるとか云ふやうなもの、幻術だとかさう云ふ仕事を扱つて居るのであります甚しいのになりますと、人を呪殺すと云ふことを職業にして居つた坊さんがあつた、宗教はどう云ふ宗

教かと申しますとポリネシヤンの宗教と同じであります。四つの主なる神様があります、第一はカネと云ふ神様であります。是は世界創造の神であります。第二がカナロアと云ふ神、是は世界創造の神と兄弟であります。どう云ふ仕事をするかと云ふと井戸を作りますことと、バナヽの外有用な植物を輸入した神様であります。農業の神様みたやうであります。さうして此神様の住んで居る場所は決つて居る、布哇十二島中の一番大きなハワイ島と云ふ島に住んで居るのであります。是はもう少し研究すれば、面白いことだらうと思ひます。第三はクウと云ふ是は荒神であります。第四がロノ、雨を司る神様であります。其他に風の神様もありますし、是は日本も同じでありますが岩の神様、木の神様、八百萬の神様もある譯であります。キラウエヤ火山そこにペレと云ふ神様があります、それは一番恐れられた神様で此傳説も戀愛問題であつて、其ペレと云ふ女の怒りが火山の火となつて燃えるのであります、甚だしいのは淫猥の神、ラカと云ふ女の神様があります。さう云ふやうに兎に角、澤山の神が居つたのであります。詰り僧侶は此等の神に事へて居る譯であります。併しそれを支配する所の者は酋長であります。先程お話申上げましたやうに此布哇の昔、と申しましてもさう古いのではありませぬが、社會的秩序と云ふものが隨分暴虐的でありまして、其上に宗教が非常に壓制的である、壓制的な宗教であつて其甚しいのになりますと、神が人身御供と云ふものを要求するのであります、酋長が命ずるのであります、神を

祭る毎に人身御供がある。それから禁制タブーと云ふものがあります、之を犯した者は神に背き國の規定を犯す者として、非常な嚴罰に處せられたものであります。

どう云ふ禁制があつたかと申しますと、如何に此暴虐的であるかと云ふことが分るのでありますが、男子と女子とは別の部屋で食事をする、若し女が男と共に食事をしたり、或は男子の食堂へ女が入つて來たら殺されるのであります。それから女はバナヽ、豚、コヽナツ、亀、或は或る種の魚を食べてはならない、彼等に親しみの多い物を禁ぜられたのであります。普通の平民が酋長の影を踏みますと死刑になります。それから禁制の日、タブーの日には酋長と云ふ者は神樣の神殿に閉籠つて了ふのであります、誰にも會はないのであります。其日には布哇の女は船に乘ることを許されない。それから或る禁制の期間には音聲を發してはいけない、音をたてゝはいけない、一切の音を出すことを許さない、火を焚くことを許さない。をかしい話でありますが、其日になりますと犬の鼻に網をかけて「わん」と言はないやうにする、鷄は木の鉢で覆うて了ふ、「こけこつこう」の聲が聞えないやうにと云ふことまでやつて居ります。其他獵をされないとか、湯に入れないとか或はポイ、其ポイと云ふのは彼地の常食で日本の米に相當するもの、丁度、里芋のやうなものを醱酵させて、酢つぱくなつたものでありますが、さう云ふものを作ることを禁ずる、それが禁制の主なるものであります。それから序にカフナイズムと云ふものを申

上げます。偉大なる神々はヘイアウスといふお寺で人身御供をそなへて祀られた。ヘイアウスといふのは、戸外に圍ひがあつて其圍ひの中で祭壇を設けてやる。其周圍の壁と申しますのが恐しい木造の偶像であります、其偶像を詰りヘイアウスの周りに立てゝ其中に祭壇を設けて人身御供などを供へて祀つて居るのであります、偶像崇拜でありますかういふ崇拜の外に廣く行はれたのはカフナイズムであります。カフナと申しますのは醫者のことであります。其醫者はどう云ふとをやるかと申すと、今日で言へば精神療法でありませうか、呪文を唱へまして精神療法をやる、私共の側に土人が居りまして、さうしてそれが心臓病に罹つて死かゝつて居る、中々醫者に見せませぬ、どうするのか、醫者に見せたら宜いちやないかと云ふと、カフナが來てやります、それが呪文を唱へて拜むのですが、一晩中拜んでゐる、所が醫者ですからそれが仁術であるべき筈でありますが、頗る不仁術である。先き申しましたやうに人を呪殺すことをやる、頼んで行けばさう云ふことをやるので、私共の子供が大正十二年の十一月頃から翌年の三月頃にかけて病氣をやりましたので、それはカフナか憑いて居るのだ、私の家の者を呪殺さうと云ふ者があつて、家にそれが憑いて居るのだから、其家を出たら宜いぢやないかと云ふ注意をしてくれました。今日でもまださう云ふ古い迷信に囚はれて居る者が、澤山あるのであります。で殺す場合にどう云ふ風にしてやるかと言ひますと、自分が殘さうとして居る者の躰に着いて居る物を手に入れる必

要がある、大概頭の髮、それから爪とか或は唾痰であります、頭の髮爪などを手に入れる譯に行かない場合には多くは痰や唾を取る、そこで痰唾もうつかり吐けぬ譯で、酋長には痰壺持ちと云ふのが付いて居りまして、それが名譽ある役人になつて居ります。

それから家庭生活を申上げます、日本人より土人の問題が多くなりましたが、家庭の結帶、締括りの帶はルーズであります。一夫多妻或は一妻多夫と言つたやうな風であります。甚しいのになりますと、此方の全家族兄弟が向ふの全姉妹の所に全部結婚をしてしまふと云ふことをやつて居る、それで子供は自分のをばさんに當る人が母親だと云ふやうになつてゐる。をばさんであつて同時にお父さんの妻君であります。かようにをばさんとかをぢさんとか云ふ者は皆お父さんお母さんとなりますから、をぢをばとは申しませぬ、さうして子供が澤山出來ますが、矢張りさう云ふ結果小さい子供を殺すと云ふやうなことが、非常に流行したらしいのであります。で母性中心でありますが親族關係などを考へても、お父さんを除り考へない、お母さんの關係を考へる。前にお話しましたやうに彼方の土人の女と結婚をすると、それの家族が皆やつて來ると云ふ譯であります。斯う云ふやうな點から考へますと土人の家庭と云ふものは非常に昔は乱れて居つたものでありますが、今日基督教の影響を受けて、原則として一夫一婦の制度がありましても、併し尙此家庭と云ふものは確乎としたものでありません、その彼等の放縱なる生活と

云ふものから、彼等の家庭は非常に乱れて居ると斯う見て宜いと思ひます、家庭の因襲的弱点はまだ殘つてゐて、子供を貸したり子供をやつたりすることは平氣なのであります。其代り又宜いことがありまして若し孤兒でもありますと、自分等の所へ連れて歸つて育てると云ふこともありますが、大体さう云ふ風に家庭はなつて居ります。

それから先程お話申しました通り、性的生活は非常に淫なのであります。皆樣も先年東京で博覽會のありました時に布哇からフラダンスといふのが來たのを御覽のことと思ひますが、是は淫猥な女神ラカを祭る爲めの踊りでありますが、やり方は踊其もの或は其踊りについて奏でます樂器其物が、非常に淫猥なことを現して居るのであります。迚も面を背けずには居れないやうに本當の踊りはひどいものであります。それは併し神を祭る方法としてやつたのであります。それを唯さうした祭事にばかり用ひてくれるならば宜い、宜いと云ふこともありませぬが、それを今日ではちよつとした酒の席でもやる、小さい子供が居りませうが、何が居りませうがどんな席でもやる、又子供自身にもフラダンシングを敎へる、さう云ふ所から生れて來る子供が、どんな者になるかと云ふことは想像が着く譯であります、さうした布哇の生活でありますから、隨分基督敎が入つて來ます迄は、淫な生活であつたのでありますけれども、千八百二十年に基督敎が初めて入つて參りまして、斯うした方面の施設に力を盡すことになりま

した。それ迄はどうも布哇の生活と云ふものが殆どぶち壞されて、そこに寄港します水夫などに依つて、全くさう云ふ生活が蹂躙されて居つたのであります。布哇には所謂無道德の時代があつたのであります。千八百二十年に基督敎が入ると共に、斯うした方面の改革をしてくれた譯でありまして、基督敎徒は最初一番眼を着けましたのは布哇の王室であります、王室を基督敎化しようと云ふので王の側室を說くと云ふ風にして、先づ王の方から基督敎化したのでありまして其結果が非常に良かつた譯でありまして、仕舞には王の命令で以て此王家が中心になつて、遂に基督敎化運動が始まると云ふやうになつたのであります、唯私共が何時もながら感心します所は基督敎の人々のやり方は一番最初は言葉であります、英語の普及に努めたのであります。先づ來ると間もなく王室に英語を敎へました。それ迄は彼方には文字も何にもなかつたのでありますが、その文字の無い所へ英語を敎へ込みましてバイブルが讀めるやうにする、仕舞には到る處に學校を作り、其學校も全くの寺小屋で一時に何千と云ふ澤山の學校が出來た譯であります。さうして仕舞には王を動かし知事を動かしましてさうして、文字を知らなければ王室に働くことも出來ない、事務所に働くことも出來なければ、仕事に就くことも出來ない、結婚することが出來ないので滔々として敎育を受けることになつた。其他基督敎が宣傳をして古い所の宗敎の偶像破壞を實行しまして、それが段々と進んで來ました。のみならず產業の方面に努力をして、兎に角人生

に必要なる總ての機關が此基督教の牧師そのものに依つて造られ、其プリミテーブの布哇土人の生活が一足跳びに變つたのであります。其點になりますと今日日本人が海外に發展します上に付ても、殊に日本の宗教が海外に於て發展しようとする上に就て、矢張り餘程考へなければならぬ點ではないかと思ひます、以上は基督教徒の功績の方の明るい方面を申上げたのでありますけれども、併し暗い方面なきにしも非ずで、今日殆ど布哇土人の總てが白人を呪うて居るのは、左にバイブル右にワインがあつたと云ふことなのであります、劍ではありませぬが、ワインが布哇土人を滅したと布哇の土人は言つて呪つて居るのであります。酒を飲まして彼等の無智に乘じて、彼等の文字を知らないのに乘じて其土地を借りると云ふ契約をする、其實それが既に白人の手に入つて居つたと云ふことは、ざらにあるのでありまして、土人は恐らく白人に好意を有つて居らないと思ひます。其反動として日本に非常に好意を有つて居ります。先年學校問題が起りました場合にも、詰り日本學校撲滅運動であつたのでありますが、其時分にも現に下院の方は三十名の中二十六名位土人であつたと思ひましたが、それに握潰しの運動をしました、三十人位の中で二十三人も土人の味方が出來たので大丈夫と思ひました所が、第三讀會になつて白人の方は懷から星條旗を出しまして、貴公等は日章旗下の議員か、それとも星條旗下の議員かと叫びました、そこは亡國民の悲しさでぐにやぐにやとなりまして、日本の學校問題は下院をパッスしたとがあり

ましたが、勿論上院は喰止めたのであります。弱い所がありますが同情は有つて居るのであります。兎に角色々の功罪は見方に依つてございませうが、昔の封建時代、封建の專制時代から立憲時代になりまして、更に共和國になり、さうして今日米領の一部としてあゝ云ふ民主政治をするやうに迄なりましたと云ふ、是は一種の革命でありますが、併し革命が殆ど劍に血ぬらずしてやつた、言換へますならば道德宗敎等の力に依つて、此革命を成し遂げたと云ふことは、恐らく世界に比類の無いことではと思ふのであります、これは特筆すべき點と思うて居ります。

それから其序に申上げて置きますが、日本の方から宗敎が彼方へ大分這入つて居ります。併し是は最初は全く日本人相手の宗敎の積りで行つたのであります。彼方へ最初參りました勞働者は三年契約で參つたのであります、三年經てば歸つてしまうと云ふ單身の渡航であります。併しながら暫く彼方へ參りまして生活する間に於て非常に彼等が孤獨を感ずると云ふ所から、宗敎の慰安を望んで居りましたのと實際死亡者が澤山出て來ますと彼等は己むを得ず棺にも入れないで穴へ埋めてしまうか或は密柑箱位の木の箱の中に入れて埋め込んでしまう、而も勞働者で轉々しますから、それを祀つてやる者もないと云ふ有樣を見まして、矢張り寺の必要を感じたと云ふこともありませうし、又初期の日本勞働者が酒と女と賭博と、さう云ふ風な荒んだ生活に落ちてしまつたから、どうしても宗敎の力に依らなければ、本當

の發展は出來ない、勞働者の力のみに依つて發展は出來ないと云ふ其ことに氣の付いた識者もありまして、日本から宗教家が參りました。私は序でながら申上げたいと思ひますが、本當の海外發展と云ふとはさう云ふ精神的慰安を考へる宗教を無視して出來るものではないと思ふのであります。其点から考へますと南米の移民に付て、宗教家の渡航を政府が禁じて居るやうでありますが、私はさうして本當の發展が出來るであらうかどうかと云ふことを疑ふのであります。今日までの日本の歴史は大概日本人の眞先には軍旗が立ちます、併し軍旗の代りに宗教旗が眞先に立つのが順序ではないかと云ふ感じがするのであります。これについては日本の宗教家に幾多の要求すべき点があると思ひますが、併し原則として宗教が先に立つ發展でなくては本當の發展ではない、今日の布哇の現狀を見ますと可なり形の上に於ての發展はありますけれども、動もしますと布哇の日本の宗教、佛教、神道などがありますが、それが常に基督教と比較せられて其價値を批判せられる、殊に形の上に現れた所で批評せられるやうでありますが併し私は宗教價値を批判せられる場合に、さうした外面的でなくてもつと內面的に見て行かなくちやならぬのではないか、少くとも今日布哇の日本人が其移民當初と比べて、社會生活の方面から考へて非常に良くなつて來て居ると云ふことが、其處に隱れた宗教の力、現れない功績があるのぢやないかと云ふことを思ふのであつて、そんなやうな要求がして見たいやうな氣持がしますから申上げたのであります。

今日日本人が彼方に十二万も參つて居るのであります。今日まで布哇の産業界に盡した功績と云ふものは、非常に大きなものであります。日本人あつて布哇の産業は成立つたのであります。白人は非常に數が少ない上に、白人の所謂勞働者と云ふのは居らぬのであります。此點は私は加州の日本人問題とはちよつと違ふ所以だらうと思ひますが、彼方は白人勞働者對日本人勞働者のトラブルがありますが布哇に於ては白人勞働者はないのでありますから、かうした勞働者としてのトラブルは少いのであります。どうして土人はどうかと云ふと怠惰でありまして、野外の勞働には不適當であります、支那人は日本人より早く行つて居りましたが數が少なかつた、日本人が本當に這入込みましたのは、明治元年でありますが、それ以來今日十二万と云ふ數を算するに至つたのであります、其大部分は耕地の勞働者、砂糖耕地、パイアツプルの耕地、彼等の力に依つてあの荒れ果てた荒蕪の地が今日産業の地となつたと云ふことに就ては、どうしても白人は日本人に感謝するのを忘れてはならぬのだらうと思ひます。それにも拘らず今日布哇に於ては色々日本人に關する問題が起つて來て居りまして、常にトラブルが絶えないのでありますが、併しその起つて來ました理由などを考へて見ますと、要するに日本人の人口が四十二パーセントにも殖えて居ると云ふこと、それから日本人の新聞が十幾つかあります、雜誌が四つかあります、佛教徒の寺院と神社が八十以上もあります、さうして各耕地には勞働の團体があります、さうして日本

學校が百四十あります。公立學校生徒四万九千人の中五十五パーセントは東洋人で、日本人は二万幾らかあります、さうして日本人は二重國籍を有つて居ります、是は先日解決されましたが、日本人は彼方で生れた者は日本の國籍と亞米利加の國籍を有つて居ります、是も此間の移民法と共に廢せられましたが、寫眞結婚といふ米人のいやがる結婚法がある。御存じの通り米國は移民を以て成つて居ります國で、此移民を如何に米化するかと云ふとは、此國の統一上から考へて當然な政策であります。然るに布哇に於きましては、亞米利加人が極く少數であつて殆ど大部分は外國人であります、而も其中に居ります所の外國人、殊に日本人でありますが、大多數を占めて居る日本人、彼方に生れました子供は應ては市民として投票權を有つのであります、彼等が將來今日のやうな增加率を以て行つたならば、遠からず半數以上の投票權を有つ時代が來る、其場合に布哇の政界はどう變つた來るだらうか、總てが日本人の掌中に、收められることになつた時に布哇の將來の運命を判ずる當路の人々は、其處に策なかるべからずと考へることは當然だらうと思ひます、今日日本の子供が非常な勢で進んで居りますけれども、更に研究して見ますと、決して他國人より多く殖えて居るのではありませぬ、全体の數から申すと增加するでありませう、土人の如く減少はしないのでありますが、どの學校に參つても大部分頭の黑い人間であります、却て西洋人の方が驅逐されさうであります、布哇の大部分は東洋人ばかり日本人ば

かりと云ふて宜しいのでありませう。之を上から見ましたならばまるで布哇は東洋人の布哇と感するでありませう。そして白人が教育費大部分の負担をするのでありますが、日本人の爲に自分等が斯ういふ負担をして居るといふやうな感情も混つて來る、さういふ点から考へて要するに將來の布哇は日本人に占領せられるのではないかといふ杞憂が、詰り色々布哇に於ける所の日本人問題を起す理由になつて來るのであります。若し此儘に行くならば是は布哇は委員政治にしなければならぬ、中央政府から任命せられたる委員に依つて政治をして、東洋人を樞機に與らしめないやうにしよう、彼等の勢力を驅逐しようといふことになつて來るのであります。布哇に於ける米國市民はそれに滿足しない、現在の布哇の政治は自治でありますけれども、併し知事は大統領から直接アッポイントされて政治を執るので、半分の自治であります、彼等の或者は他の州と同じくステートとしての自治を望むのでありますが、僅か三十万の人口で米國四十八州の他の州と比べると實に渺たる小さなものに過ぎないけれども、中央政府に對する彼等の義務は甚だ良く盡されて居ります。彼等が中央政府に納める金を考へて見ても、あの四十八州の中で人後に落ちぬと申しますが、州後に落ちぬのであります、まだ彼等の下に十七州も十九州も自分等に及ばぬものがあるのであります、さういふ点から考へますと布哇人の自治心から考へまして、自分等だけ差別扱ひを受けるといふことは感心しない、自治にしようといふのが當然であります。而も其理想

が東洋系の市民、殊に日本系市民の多數を以て遮られた居るとしたならば、其恨が日本人に廻つて來るのが當然でありまして、此事が軈て日本語學校問題にも及んで來たのであります。詰り東洋の文明を絶對に排斥しようといふのであります。此間見えました布哇大學總長ドクター・デイーンと云ふ人は、東洋の文明もよいかも知れぬ、然じアメリカにはアメリカ文明のみで澤山だ、東洋文明はいらぬと申しました。亞米利加の建國記念塔はあれは何百尺といふ高い紀念塔だが、それを造つて居る所の石は、世界各國の石を集めたと云ふではありませぬか、さうすると私の考へる理想は、兎に角、亞米利加精神と云ふものは世界各國の宜いものを取つて、それを粉にして一つのものにして作り上げる、亞米利加ニズムと云ふものは、さうして作つたものだとすれば、亞米利加ニズムは完成して居るものではない、兎に角如何なる國の精神でも取らなければ完成したものではないと言つて居る、今完成に向つて、理想に向つて進みつゝあるものである、さうすれば亞米利加の建國紀念塔が象徴する所の世界各國の文明を取るのが宜いのかも知れぬが、日本の文明は嫌ひなのだと撥ねつけるのであります。併しながらそんなことは、人力で如何ともすることは出來ないのでありまして、何れ斯うした東洋の文明は、自然混融される時が來るだらうと思ひますが、併しながら彼の人々は非常に東洋の文明を排斥する、日本人の勞働者も排斥する、日本語學校も排斥する、日本の寺、神社を排斥します、詰り布哇が東洋化されると云ふこと

を、彼等は嫌ふのであります、まだ他にも理由が澤山ありますけれども、さう云ふやうな点からして、非常に亞米利加人は東洋と云ふものを嫌つて、其結果日本人に對する色々な問題が起つて來て居ると思ひます。併しながら此解決は、非常に難しいことであります、私は決して或一部の人を亞米利加に送つた所が、日米親善の本當の融和などが出來るのでなくして、結局東洋の文明なり、東洋の藝術なり、理想なり、さうした所のものが正しく彼方に紹介せられて、彼方の人が本當にそれを理解した所に、初めて此日米の親善と云ふものが行はれるのだらうと思ひますから、斯う云ふ点から考へますと、單に宗教家、教育家ばかりでありませぬ。総ての人々が東洋文明に對する一の責任者として大使命を有つた者として、彼の地に於て活動しなければならないとと思ひますし、又内地に於ける人々も、さうした腹を以て進んで行かなければならぬかと思ひます。大變雑なお話を申しあげました、日本人に關する問題としては大變抜けた点があると思ひます。唯時間を考へて簡單なことを申上げて責を塞ぐことにいたします。